

# 児童英語教育支援プログラムの試み

— 学生指導の立場から —

松久保 暁子

キーワード：小学校英語活動、協働学習、フィールドスタディーズ

## 概要

本プログラムは、東京都内の公立小学校で、本学の学生が主体となって英語活動を行う取組として2007年度秋学期に試験的に開始され、2008年度から単位修得ができるプログラムとして実施されている。本プログラムの立ち上げからおよそ1年半が経過したが、本稿では学生を指導する立場から活動を振り返るとともに、今後の課題を明らかにしていきたい。

本プログラムの目的は、児童が「英語に触れる楽しさ」を体感することで、児童の英語に対する関心を高め、今後の英語学習への動機づけを図ること、そしてこの活動に携る学生の育成という、「児童」と「学生」が共に学び合うことである。また、学生はティーチングアシスタントとして小学校での英語活動の補助として参加するのではなく、実際に授業を運営している。そのため活動の中心が指導案や教材作成、模擬授業といった事前準備となるため、指導案作成から実際の授業実施までの一連の過程や授業実践を経験できるという点では、中学校や高等学校教諭を目指す学生にとっても有益な活動であると言える。さらに小学校というフィールドで学生が自らの力を社会に貢献することにより、学生の学習意欲を高めるプログラムとして機能していることも大きな特徴である。そして所属する学部、学群や学年を越えた仲間と協力しながら、学生自身で指導案や教材を考案し、作成することで、主体性を培うことができるプログラムである。

また学生の活動の様子や活動後のレポートから、学生自身の英語力の向上だけではなく、児童とのコミュニケーション、そして学生間のコミュニケーション力の育成、協働学習による協調性の育成に貢献するプログラムとして機能していることがわかった。

## 1. プログラムの位置づけ

現在、基盤教育院の科目区分の1つである「フィールドスタディーズ」には6つの授業科目があるが、本プログラムはその中の1科目である「地域社会参加」のプログラムである「地域学校パートナーシップ」に属する1プログラムとして実施されている。フィールドスタディーズとは「キャンパスの外に出て、グローバルとローカル両社会に参加・貢献し、同時に自らもその経験から学んで人間力を高める、という体験的な学習」（「フィールドスタディーズ『地域社会参加』履修の手引き」）であり、学生が持っている様々な力を学外のフィールドで最大限に発揮し、社会へ貢献することで学生自らも成長することを目的としている。そしてその理念に則り、「地域社会参加」は「桜美林近隣の地域社会（日本人および外国人コミュニティ）や団体（NPO や学校）の活動に参加し、教室では学べない生きた社会の現実を体験的に学び、自らの『人間力』の成長を目指す実習」（『2009 年度講義案内』）として運営されている。

本プログラムは、東京都内の公立小学校が活動場所となっている。各学期3回から4回に渡る小学校での英語活動に加えて、小学校での英語活動を行なう前に、英語活動を行なう学年の授業見学および授業サポート（授業補助）を行なっている。この授業見学や授業サポートを通して、担任の先生と児童とのコミュニケーションを観察できること、また児童とコミュニケーションを図ることができるため、その後の英語活動を円滑に行なう上で重要な活動となっている。また小学校での活動に加えて、大学では毎週2コマを使い、指導案や教材作成、練習、模擬授業を行なっている。

## 2. 履修者

2008 年度の履修者は「表1 学年別履修者数」の通りである。秋学期の履修者9名のうち、2名が春学期から継続して活動に参加したため、2008 年度の履修者数は12名となった。また2007 年度の履修者4名のうち、3名が2008 年春学期に継続して活動し、そのうち1名は2008 年度秋学期も継続して参加した。また、2008 年度秋学期は1年生、2年生が3名となり、履修者のおよそ半分を占めた。

学部および学群別の履修者数は「表2 所属別履修者数」の通りである。フィールドスタディーズ科目区分に属する科目は、学群や学年を問わず履修することが可能である。そのため、履修者の所属は様々で、2008 年度の履修者12名のうち、英語を専攻とする学生は2名、また中学校や高等学校の英語科教諭を目指し、教職課程の科目を履修している、または履修する予定の学生は4名だった。また経営政策学部、ビジネスマネジメント学群、

健康福祉学群の学生が履修していた。これらの学生は、「留学や海外生活をきっかけに英語を学ぶ楽しさを知り、その楽しさを子供たちに伝えたい」、「将来、児童英語教育に携りたい」、「子どもが好き」というように、子どもが好きで子どもと接する機会を持ちたいという希望から、このプログラムに参加していた。また学習塾などで英語を中学生、高校生に教えた経験がある学生は少なく、初めて英語を教える学生が約6割だった。

表1 学年別履修者数

	春学期	秋学期
1年	0	1
2年	0	3
3年	4	5
4年	0	0
科目等履修	1	0
計	5	9

表2 所属別履修者数

● 2007年度以降入学者	
リベラルアーツ学群	2
ビジネスマネジメント学群	2
健康福祉学群	1
● 2006年度以前入学者	
経営政策学部ビジネスマネジメント学科	1
文学部英語英米文学科	2
国際学部国際学科	3
その他（科目等）	1
計	12

### 3. 活動内容

本プログラムは（1）オリエンテーション、（2）授業準備、小学校での活動の振り返り、（3）小学校での活動が中心となっている。それぞれの活動内容を紹介していく。

#### 3-1 オリエンテーション

説明会を実施した後、履修希望者を対象としたオリエンテーションを実施した。オリエンテーションでは活動の目的や内容を説明し、履修者の自己紹介を行なった。教職課程を履修していない学生が大半を占めていたこと、また1年生や2年生が半分以上を占める体制で実施したため、集合時間の厳守、小学校での活動に際して服装に関する指示、そして小学生と接するときの注意点などの指導を徹底して行った。このように、学生が主体となって英語活動を運営するという責任のある活動であること、そして学外での活動では一社会人としての基本的なマナーを守ることが大切であることを認識させるためにも、このオリエンテーションが非常な役割を果たしていると考えている。その結果、集合時間に遅れ

るなど、活動に支障をきたすような学生はおらず、活動場所の小学校に迷惑になるような大きな問題を起こすことなく活動を進めることができた。

### 3-2 授業準備、振り返り

活動時間をまとめた結果、「表3 2008年度 小学校での活動時間および大学での授業時間」の通りとなった。この表からわかるように、春学期の活動時間総数は約62時間（約41.3コマ）、秋学期は約41時間（約27.3コマ）となり、その中でも授業準備等の大学での活動は、春学期は約30時間（約20コマ）、秋学期は約25時間（約16.6コマ）に及んだ。春学期は毎週水曜日の1限と2限の2コマ、そして毎週木曜日の昼休みを利用して準備を行ったが、それでも授業準備が間に合わないこともあり、6限を使って準備を行なうこともあった。秋学期の小学校での活動の回数は春学期よりも少なかったが、大学での授業準備の時間は春学期と大きく変わらなかった。また秋学期は履修者が9名だったので2つのグループに分け、一方のグループが3年生を担当し、もう一方が、4年生を担当した。このようにグループを分けることで、お互いに模擬授業を評価したり、他のグループのアイデアを取り入れたりなど、春学期と比べると学生の主体性を重視して取り組むことができる体制となった。

英語活動の指導内容や方針については、小学校との調整が必要であるため、筆者が指導内容の概要や方針を決め、学生に提示した。その後、指導案の作成、ゲームなどのアクティビティの考案、教材作成は全て学生が担当し、筆者が全ての工程を確認しながら進めていった。

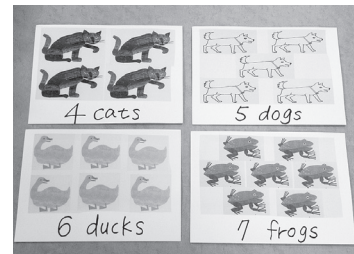
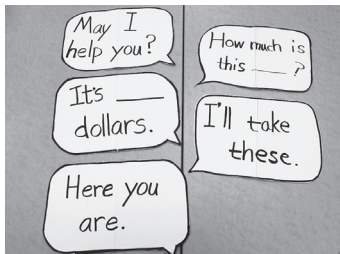
小学校での英語活動終了後、活動を振り返るための活動記録の提出を求めた。さらに活動記録をもとにディスカッションを行うことで、問題点を共有し、解決方法を全員で考えて次の活動へつなげることができた。その結果、自主的に小学校での英語活動を振り返りながら、児童が楽しく英語を学ぶことができるように様々な工夫を提案し、指導案や教材を作成できるようになった。この振り返りが授業内容や方法の改善、そして学生の意識を高めるために非常に重要な役割を果たしていたようである。

表3 2008年度 小学校での活動時間および大学での授業時間

	春学期	秋学期
小学校での活動	約32時間（1回あたり約4時間、8日実施）	約16時間（1回あたり約4時間、4日実施）
大学での活動 （授業準備など）	約30時間（毎週水曜日2コマ+昼休み）	約25時間（毎週水曜日2コマ+昼休み）
総活動時間数	約62時間	約41時間



大学での活動（模擬授業の様子）



使用した教材

### 3-3 小学校での活動

2008 年度春学期は、水曜日と金曜日に小学校での英語活動を実施した。当初、水曜日は 2 年生と 3 年生、金曜日は 4 年生の英語活動を担当することになっていたが、小学校からの要望により、金曜日は 4 年生に加えて 1 年生と 2 年生も担当することになった。45 分間の授業を行なうには、授業準備にかなりの時間を要するため、授業開始から 15 分間、または終了前の 15 分間で英語活動を行い、英語活動以外の時間はそれぞれ担当のクラスで授業サポートを行なった（詳細については「表 4 2008 年度小学校での活動スケジュール」を参照）。

また秋学期の小学校での活動は水曜日に実施した。担当の学年は 3 年生と 4 年生のそれぞれ 2 クラス、計 4 クラスだった。英語活動では、3 年生担当のグループは 4 年生のクラスではサポートに入り、4 年生担当のグループは 3 年生のクラスのサポートに入ることにし、全員が全てのクラスの英語活動に携わるようにした。授業時間は春学期と同様、15 分間だったが、小学校の担任の先生方から 45 分間の授業を実施してほしいという要望があり、ゲームを繰り返したり、他のアクティビティを取り入れ、2 回目と 3 回目は、45 分間実施したクラスもあった。



## 春学期

活動時間：8：20-12：20

担当学年：1、2、3、4年生（各学年2クラス、計8クラス）

日時	活動内容
●水曜日	
4/30（水）	授業サポートのみ
5/14（水）	英語活動①& 授業サポート
7/2（水）	英語活動②& 授業サポート
7/9（水）	英語活動③& 授業サポート
●金曜日	
5/9（金）	授業サポートのみ
5/30（金）	英語活動①& 授業サポート
6/13（金）	英語活動②& 授業サポート
6/27（金）	英語活動③& 授業サポート

## 秋学期

活動時間：8：20-12：20

担当学年：3、4年生（各学年2クラス、計4クラス）

日時	活動内容
10/8（水）	授業サポートのみ
10/29（水）	英語活動①& 授業サポート
11/19（水）	英語活動②& 授業サポート
12/10（水）	（午前）英語活動③& 授業サポート
	（午後）留学生との英語活動

表4 2008年度 小学校での活動スケジュール

英語活動のない時間に実施した授業サポートの内容は、教科により様々だった。例えば算数の時間ではテストや練習問題の採点、生活科では児童と苗木を植え、体育ではマット運動の補助などを行っていた。また授業開始前の朝の集会にも参加し、休み時間には図書室での本の読み聞かせや教室で児童とゲームをするなど、児童と接する貴重な時間となったようだった。

後に挙げる「5. 活動後のレポート」からもわかるように、英語活動を行なう前や、英語活動がない時間に授業サポートを行なうことで、児童との接し方、児童の反応や様子を把握することができたようだった。そして指導案を作成する上で、これらの体験が非常に参考になったようだった。また児童も初対面の学生に英語を教わるよりも、授業の前に学生を知ることによって距離を縮めることができ、スムーズに授業に参加することができた様子だった。



小学校での英語活動

## 4. 英語活動の授業内容

ここでは、春学期と秋学期の授業内容の概要を挙げる。先にも述べたが、指導内容や方針は筆者が提示したが、授業の流れやアクティビティの内容、説明の方法は全て学生が考案し、筆者が適宜コメントをして、修正していった。資料1は学生が作成した指導案の一部である。

### 4-1 春学期

春学期は *The Very Hungry Caterpillar* と *Brown Bear, Brown Bear, what do you see?* の2冊の絵本に登場する食べ物や動物の名前を使いながら、簡単な英会話を楽しく学べるような授業を展開した。授業内容は小学校の英語活動の先生方から既習事項を確認し、先生方と相談した上で決めたものである。1年生にとっては初めての英語活動だったので、楽しみながら英語の音に触れることができるように、apple, strawberry, cheese, sausage のようになじみのある食べ物を選び、簡単なゲームをしながら英語の音を聞き、発音の練習ができる内容にした。2年生と3年生は語だけではなく、「色＋名詞」といった名詞句も取り入れた。また歌を用いて動物の泣き声（擬音語）を導入した。児童は英語の音に慣れると同時に、日本語と英語の擬音語の違いにも気づいたようだった。

4年生はゲームだけではなく、最終回となる3回目の授業で、英語で買い物をするロールプレーを行なうための指導案を立てた。そして買い物の際に使う表現は、口頭での説明ではなく、ロールプレーをしながら導入した。

春学期は1クラスを5グループ（1グループ6名程度）に分け、1人の学生が1グループを担当して授業を進めた。しかしグループによって若干進度が異なるせいか、児童は他のグループが何をしているのか気になり、授業になかなか集中できないということが多く見られた。そのため、春学期の途中からグループに分けずにクラス全体にロールプレーをしながら説明を行ったところ、全員が集中して説明を聞くようになった。そのあとで、児童1人1人が英語を話すことができるゲームなどのアクティビティを取り入れた。学年ごとの授業内容の概要は以下の通りである。

#### 1年生

	目標	導入する主な表現、語
1 回 目	英語で簡単な挨拶をしよう。食べ物の名前を発音してみよう。（挨拶の歌“Hello Song”、自己紹介、英語の音に慣れる）	<ul style="list-style-type: none"> <li>• “Hello Song”</li> <li>• Hello. My name is . . .</li> <li>• <i>The Very Hungry Caterpillar</i> に登場する食べ物の名前（外来語としてよく使われているものを選定）e.g. apple, strawberry, orange, ice cream, cheese, sausage, cupcake</li> <li>• 上記の単語を使ったカードゲーム</li> </ul>

2 回 目	好きなものを英語で聞いてみよう。 (好きなものを聞く英語表現に慣れる)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• “Hello Song”</li> <li>• 1 回目の復習（食べ物の名前）</li> <li>• “Do you like …?” “Yes, I do. / No, I don’t.” 食べ物の名前を使った練習</li> <li>• “Do you like…?” チェックシートを使って、クラスメートに好きなものを聞いてみよう。</li> </ul>
-------------	--	--

## 2 年生、3 年生

	目標	導入する主な表現、語
1 回 目	英語で簡単な挨拶をしよう。 英語で動物の名前、色を発音してみよう。（「色＋名詞」の表現）	<ul style="list-style-type: none"> <li>• “Hello Song”</li> <li>• “My name is …”</li> <li>• <i>Brown Bear, Brown Bear What do you see?</i> に登場する動物や、2 回目に行う動物の鳴き声を練習するときに使う動物。e.g. bear, bird, duck, horse, frog, cat, dog, sheep, goldfish</li> <li>• 上記の単語を使ったゲーム（Memory）</li> </ul>
2 回 目	英語で動物の鳴き声を練習しよう。（英語の擬音語に触れながら、英語の音に慣れる）	(e.g.) “What does a dog say?” “It says …” 歌を歌う。
3 回 目	英語で数を数えよう。 (1-10 の数の練習、名詞の複数形の導入)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 1-10 の練習。</li> <li>• 「数＋名詞」（前々回、前回の動物を使って）</li> <li>• 1 回目で導入した動物の単語を使ったゲーム</li> </ul>

## 4 年生

	目標	導入する主な表現、語
1 回 目	数、通貨の言い方、買い物で登場する身の回りにある文具の言い方を練習しよう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 1-20 の練習</li> <li>• 10-90, 100, 110, 120, 130 … 1,000</li> <li>• 文具の名前</li> <li>• 上記の単語を使ったゲーム（Memory）</li> </ul>
2 回 目	買い物のときに使う表現を練習しよう。	• 買い物の表現（ロールプレーで説明）※ 詳細は「資料 1」を参照。
3 回 目	英語で買い物をしよう。	買い物ゲーム（1 回目の文具や数、2 回目の買い物の表現を使ったロールプレー）

## 4-2 秋学期

秋学期の最終回に本学のアメリカとオーストラリアからの留学生 2 名をゲストスピーカーとして招き、このプログラムに携わる学生と共同で授業を行った。英語活動で学習した英語を使って英語母語話者でコミュニケーションを図ることで、英語に対する興味を高め、今後の英語学習の動機づけとなるような授業内容とした。そして留学生には事前に指導案を提示し、学生を交えて打ち合わせを行った。児童が学んだ英語を使ったアクティビティに加えて、国際理解の要素も取り入れるために、留学生の母国の紹介などを写真や絵を提



示しながら行った。これまで教室内で学習した英語を使って外国人とコミュニケーションを図ることは、児童にとってこれから続く英語学習に対する動機付けとなり、この動機付けこそが小学校の英語教育にとって重要な要素だと考えたからである。

児童は最終回までの3回にわたる英語活動で学んだ表現を使って、間違いを恐れることなく積極的にコミュニケーションを図っており、英語母語話者とコミュニケーションをとることができる機会を持てたことは非常に貴重であった。短期間ではあるが、目標掲げて指導案を作成し、実際に外国人と英語でコミュニケーションを図る機会を作ることは非常に有意義な内容であったと思う。

また、新出事項の導入の際は、先に挙げた4年生の買い物での表現の導入と同様に会話の場面を設定し、ロールプレーをしながら説明をした。例えば「名前は？」は“What's your name?”「好きな食べ物は何か」は“What food do you like?”といった対訳での説明ではなく、会話の場面を設定し、「初めて会う人にあいさつするときは、どういえばいいのか?」「名前を相手に聞くときは?」「相手の好きな食べ物を聞きたいときは、何と云えばいいのか?」といった質問をしながら導入した。授業の概要は以下の通りである。

### 3年生&4年生

	目標	導入する主な表現、語
1 回目	英語で自己紹介をしよう。 出身地を聞いてみよう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• “Nice to meet you. My name is ...”</li> <li>• “What's your name?”</li> <li>• “Where are you from?” “I'm from ...”</li> <li>• “Do you like ...?” “Yes, I do. / No, I don't.”</li> <li>• ゲーム</li> </ul>
2 回目	好きなものを聞いてみよう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• “What ... do you like?” “I like ...”</li> <li>• (e.g. What food / sports / color ... do you like?)</li> <li>• “What's your hobby?”</li> <li>• ゲーム</li> </ul>
3 回目 (午前)	わからないものを聞いてみよう。 1回目、2回目の復習	<ul style="list-style-type: none"> <li>• “What's this / that?” “It's a ...”</li> <li>• ゲーム</li> </ul>
(午後)	留学生との英語活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自己紹介、留学生への質問、留学生の母国の紹介</li> </ul>



留学生との英語活動

## 5. 活動後のレポート

春学期、秋学期ともに、学期末に記述式のレポートの提出を求めた。レポート課題の内容は次の通りである。

- (1) テーマ「児童英語教育支援に参加して」  
活動を振り返りながら、項目別にそれぞれの活動で考えたこと、学んだことなどを述べなさい。
- ① 授業準備（指導案・教材作成、練習）
  - ② 小学校での英語活動
  - ③ 授業サポート（児童との接し方について）
  - ④ 今後の課題
- (2) 字数制限：1,600 字以内

以下は、学生のレポートの一部を項目ごとに抜粋したものである。

### ① 授業準備（指導案・教材作成、練習）

- 授業計画を立てたことがなかったので、何をどのように作ればよいのかわからなくてとても大変だったが、実際に子供たちに楽しんでもらえたので、すごく達成感があった。
- 3 学年、6 クラスということもあり、準備は相当大変だった。しかし大変だからといって、授業で使う教材を手抜きすることはできない。準備は大変だったが、作った教材には児童が興味を持ってくれた。
- 準備はお昼休みなどを使って無理なく集まれたのがよかった。教材づくりも自分たちで行ったが、簡単なものだったので全く苦にならなかった。
- 思っていたよりも大変でした。大変と言うよりも難しかったです。普段私たちが使っている言葉が児童に伝わらないときがあったので、児童にどのように伝えたらいいのか、どうしたら伝わるのか、どうしたら児童が興味を持って聞いてくれるのか。何回も壁にぶつかりりましたが、実際に練習をしながらよい方法を見つけることができた。
- 準備の時間が足りないと思っていたけれども、一人でなく、みんなで考えられたからできた。
- 指導案づくりが一番の課題だった。指導案をしっかりと作ること、練習や当日の活動に大きく影響すると考えている。
- 自分たちで授業の流れを考え、工夫する準備の時間はいつも楽しみだった。

## ② 小学校での英語活動

- 回を重ねるにつれて、児童に楽しんで英語に触れてもらうことを心がけるようになった。楽しむこと（興味を持つこと）は学習の基本であると感じるようになった。中学・高校と小学校では学習の質や方法が異なるが、学習者のレディネスや興味を見極めて計画を立て、実行するというプロセスに関しては共通点が多く、そういった意味での技術的な学びもあり、充実した活動だったと感じている。
- 実際に授業活動を行ってみると、いくら準備をしても、私たちが考えていたようには進まないということに悩まされた。
- 次のクラスの授業の前に意見交換をして、臨機応変に対応できたことにはチームワークの強さを感じた。
- 児童が楽しそうにしているのを見て、授業をしている私もとても楽しかったです。
- 子供たちにわかる言葉で伝えることの必要性を実際に感じる事ができた。
- 指導案に沿って進めたが、練習では存在しない児童との対話は重要である。特に復習の時に覚えている児童が積極的に発言してくれた。これは私たちの授業が伝わっていることを意味し、不安をなくすものであった。
- 自分たちが予想したとおりには授業は進まないこと。その場その場の判断力が授業では必要だと感じた。
- 子供たちの様子をしっかりと観察し、子供たちの目線で物事を考え、次の指示をどのようにするかを決めることが大切だということを学んだ。

## ③ 授業サポート

- 授業サポートをした方が英語活動がしやすくなり、子供たちとも楽しい時間を過ごすことができた。
- 指導案を考える際に、授業サポートで児童をよく観察しておくことが重要だと考える。
- 答えを教えずに説明する難しさを感じた。
- 授業をマネジメントする上で、児童全員とのコミュニケーションが大切である。また授業中に話すことができない分、休み時間に趣味や好きなもの、学校について教えてくれた子もいた。
- 当たり前に行えることをいざ教えるということはすごく難しかった。しかし、教えた子供が理解したり、一人でできたりしたときの笑顔を見ると充実感でいっぱいになった。

## ④ 今後の課題

- 児童たちは私たちの発音を耳で聞いて覚えるので、しっかり私たちも正確な英語を教

えなければならないと思います。

- 外国人と交流する機会を作り、学んだことをすぐに活かせるように「工夫して」教えてあげることが必要だと思った。
- 一人でなくて、協力して何でもやっていくことが大切だということをもんだ。
- 臨機応変に対応し、子供たちの目線で物事を考えることが必要だと思った。普段大学で学んでいるだけでは身につけることができない多くのことを学ぶことができた。

## 6. 最後に

1年半に渡る活動を通して、小学校という学外のフィールドでの活動を通して、大学での講義では得ることができない様々な経験によって、学生の活動に対するモチベーションが高められていることがわかった。学生が自分達の力が社会の中で必要とされていることを実感することによって活動に対する意識を高め、仲間と協力しながら成長する機会を与えることができるプログラムであると言える。

活動後のレポートでは、小学校での活動だけではなく、大学での授業準備が思ったよりも大変だったという意見が多かった。大学で行なう授業準備での学生の様子を見てみると、グループ内での意思疎通がうまく図れず、授業準備がなかなか進まない場面が度々見受けられた。筆者は、学生がそのような場面に直面しても手助けをせずに見守るように心がけた。なぜならば、学生が直面する問題を仲間とともに解決し乗り越える大切さを、体験を通して実感すること、そして学生自らの力で困難な問題を乗り越えるためのコミュニケーション能力、協調性、そして主体性を育成することも、この活動の大きな意義であると考えているからである。そういった壁を乗り越え、児童が楽しみながら英語活動に参加している姿を見て、学生は回を重ねるごとに「子どもたちが楽しんで英語を学べるような授業を作ろう」という意欲が高まると同時に、授業を行なう責任感が増してきたように感じた。

小学校での英語活動では、何よりも発音が重要である。授業準備では正しい発音ができるように何度も練習をした。小学校での授業を通して、小学生は教える側の発音をそのまま真似ることを学生が認識したため、正しい発音を身につけることが重要であることを痛感したようだった。そして発音には十分注意しなくてはならないという意識を持って取り組んでいたようだった。また小学校の英語活動では文法は教えないが、教える側は正しい文法を理解する必要があることを重要するように指導したこともあり、授業案を作成する際も正しい文を導入し、それらを用いたアクティビティを行なうように心がけていたようだった。例えば、“Do you like . . . ?” や “I like . . .” の場合、like の目的語が可算名詞の場合は複数形になることや、“What’s this?” や “What’s that?” で用いられる指示代名

詞 this と that の違いなど、小学校での英語活動では説明しないけれども、授業準備の中で他者に説明できるように理解することも重視した。

また秋学期は本学の留学生の協力を得て、英語母語話者とコミュニケーションを図る機会を持つことができた。英語活動で練習してきた表現を使って英語母語話者とコミュニケーションをとることができたという成功体験は、児童の今後の英語学習の動機付けとなる非常に貴重な体験であったと同時に、留学生と共同で作り上げた授業活動は、学生にとっても有意義だったに違いない。

平成 20 年 3 月に公示された小学校学習指導要領において、平成 23 年度から第 5 学年及び第 6 学年で「外国語活動」が全面実施されることになった。文部科学省「小学校英語活動実施状況調査（平成 19 年度）」によると、全国の公立小学校のうち、平成 19 年度には約 97.1% の小学校で英語活動が実施されている。多くの問題を抱えながらも小学校での英語活動が本格的に導入されるが、本学の学生が自らの知識や体験を地域の小学校で還元することで、小学校での英語活動の一端を支える活動として発展する可能性があると考えている。

最後になるが、活動場所となっている小学校の校長先生、副校長先生をはじめ、クラス担任の先生方の強力なサポートがあつてこそ実現できるプログラムである。今後は現場の先生方からのご意見も参考させていただきながら、さらに充実した活動へ展開していきたい。

## 参考資料

桜美林大学基盤教育院 フィールド教育デパートメント. 2009. 「フィールドスタディーズ『地域社会参加』履修の手引」

文部科学省. 「小学校英語活動実施状況調査（平成 19 年度）」の主な結果概要（小学校）」

([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/03/08031920/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08031920/001.htm))



## 資料 1 指導案

英語活動 2 回目：2008 年◆月●日

【対象】	4 年 1 組、4 年 2 組
【指導者】	○○、△△、◇◇、●●
【活動タイトル】	“Numbers & Stationeries”
【目標】	数、通貨の言い方、買い物で登場する文具の言い方を練習しよう。買い物での表現を練習しよう。
【新出語彙&表現】	10 words (stationeries)、買い物の表現
【準備するもの】	picture cards (stationeries, 1-10 のみの numbers)、紙幣、エプロン、エコバッグ。授業が始まる前に、机を後ろに寄せる。前の部分をフリースペースにする。

時間	指導過程	教師の働きかけ	予想される児童の反応	留意点
2 分	greeting(whole class)	Hello, everyone. Let's sing "Hello Song".		
7 分	Review (in groups)	挨拶の復習 “How are you?” “I'm fine, thank you.” Let's make a group of 7-8 and make a circle!  <Numbers> (1) Review: 1-20 まず、グループ全員で 1-20 まで言う。 その後、順番に一人ずつ言っていく。5 の倍数の時に手をたたく。  < Review > (1) eraser           (6) paper clip (2) pen               (7) scissors (3) pencil           (8) tape (4) stapler          (9) paper (5) ruler             (10) glue  袋を用意して、袋の中に picture cards を入れる。 1 枚のカードを取り出して、児童に質問する。 “Is this an eraser?” (Yes と No 両方を答えられるように、絵とは違った単語も言う) 答え方：“Yes, it is.” or “No, it isn't” No の場合は、“No, it isn't. It's a...” と答える。		グループでなっている状態。

5 分	Introduction (whole class)	<u>New expressions (for shopping)</u>  Clerk: May I help you? Customer: How much is this? Clerk: It's . . . yen. Customer: How much is this? Clerk: It's . . . yen. Customer: I'll take these. Clerk: It's . . . yen. Customer: (お金を払う) Clerk: Here you are. Customer: Thank you. Clerk: Thank you. Have a nice day.	2つのグループに分けて座る (店員役と客役)	机を出して、カウンターを作る。  黑板にせりふを書いた紙を貼る。  必要なもの • 紙幣 • 文房具カード (大・小) • 1-10 カード (大) • エプロン • エコバッグ  進行・説明：○○ 店員役：△△ 客役：◇◇
	2つのグループ (A&B) に分かれる	【1 回目】 demonstration 児童の前で、role play をする。(1 人が店員、1 人が客の役で) 【2 回目】 説明 せりふをとめて、1 文ずつ確認する。状況を把握しながら、どのような会話なのかを予測させる。その際、せりふが書かれている吹き出しを出す。確認後、全員でリピート。 【3 回目】 教師はジェスチャーのみ。児童がせりふを言う。	demonstration を見る  会話を予測して、会話の内容を説明し、全員でリピート  店員役と客役のグループごとにせりふをいう。	※2 回目の際、最初にこちらから説明はせずに、児童に聞く。
1 分	greeting	That's all for today. Good bye! See you next week.		